



正岡子規

桶谷秀昭

小澤書店

正岡子規

定價二〇〇〇圓

昭和五十八年八月十五日印刷
昭和五十八年八月二十日發行

著者 桶谷秀昭

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田區富士見二一五—十二
電話(東京)二六三一—九二二八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

正岡子規
目次

	無窮大の野心	7
	「常識」について	29
	感受性の発見	49
	寫生	69
	寫生文	85
	漢詩と寫生文	113
	月並調と新俳句	133
	短歌革新と近代	151
	『寒山落木』	179
	『寒山落木』から『俳句稿』へ	220
	あとがき	247
	参考書目	250
	初出一覽	253

正岡子規

無窮大の野心

明治二十二年五月九日夜、正岡常規は突然咯血した。前年鎌倉に遊んだ時、血を吐き、その後何でもなかつたので、この度のも、咽喉から血が出たのだと思つた。翌日友人にすすめられて、醫師の診察を請ふと、肺だと言はれ、意外に思つた。夜になつて十一時頃また咯血した。それから一週間ほど、毎夜五勺くらゐの血を吐きつづけた。

二日目の夜、すなはち五月十日に、「時鳥」といふ題で發句を四、五十ほど吐き出した。これはのちに削除されて、『寒山落木』卷一の明治二十二年の項には入つてゐない。ただ『啼血始末』の中から二句引くと、次のやうなものである。

卯の花をめぐりてきたか時鳥
卯の花の散るまで鳴くか子規

時候は舊曆の卯月、常規は卯年生まれだつた。卯の花の散るまで鳴くか、常規は自分の餘命が五年、長くて十年と思つた。子規といふ號もこの時からもちゐた。

子規は明治十七年、大學豫備門に入り、豫備門はやがて高等中學に改稱、英語の學力不足のため一年落第したが、來年は大學に進む豫定になつてゐた。肺病は不治の病が當時の通念だつたから、子規も、この病をかかへて今後どんな方針のもとに生きるか、思ひ悩んだのも當然である。

『啼血始末』といふ戲文は、明治二十二年九月上旬の稿で、判事閻魔大王、檢事赤鬼、青鬼が被告子規を裁くといふ體裁になつてゐる。以下、句讀點をつけて引用する。

赤鬼「然らばこれより本官は意見を陳述しよう。肺病なる者は多くは遺傳に出づる者なれども、それとて善く攝生すれば左までの事はなき者なるに、今被告は少しの遺傳もなくして自ら肺患を醸せし罪の最深き者なり。之を道德上より言へば不孝なり、不慈なり。其故如何といふに病氣のため命をちぢめ且つ思ふ通り黽勉奔走すること出來ぬ故、遠くは家を興し亡父の名を擧ぐる能はず、近くは一人の母をだに安心させることもできず、又此後子孫ありとすれば遺傳によりて害を残すべし。これ即ち不孝子□といふ所以である。又哲學上より言ふ時は此宇宙間に生れて人間の義務を盡しもせず、即ち哲理も十分に窮むる能はず、よし窮めたとしても應用することは出來ない。是れ哲學上の罪人である。又國民の

義務上よりいふも出で、兵役に就く能はず、入て國英を現はすが如く所業をも爲す能はず、これも不屈の一つである。又國家の經濟上より論ずれば殖業は出來ず、興業も思ひもよらず、所謂穀漬ゴクジクしとなるは禽獸にも劣りし者なりと謂はざるべからず。且つ今日の世界は進化の世界なり、一日一日と進み一年一年と化す。然るに害を後世に残すが如きは此規則に反する者なり、退化なさしむる者なり。故にこれは獄法第百十三條に相當する者なれば五年乃至三十年の猶豫を許すといふにより、猶第四十五條を斟酌し今より十年の生命を與ふれば澤山なりと思考します。

かういふ調子である。被告はこの判決にたいして、いちいち不服だと言ふ。とりわけ「哲學上の罪人」とは受け取れぬ、哲學上人間の義務が何であるか伺ひたいものである。子規はこんなふうにも自問自答してゐる。そして、國民の義務、國家經濟上の穀つぶし、進化の違反者、それらの罪は金錢さへ澤山あればぜんぶ帳消しになるはずだ、しかるに今日の狀態の原因は「貧困」の二字に盡きてゐる、と反問する。

子規の考へ方の特徴がすでに、この戯文の中に出てゐると思はれる。まづ「哲學上の罪人うんぬんといふのは、この當時の子規の思考の癖とみてよい。べつに哲學に深入りしてゐたわけではない。『筆まかせ』（明治十八年と二十三年執筆）といふ、いはば感想集の中の『哲學の發達』といふ文章にある内容以上でも以下でもなかつたであらう。それによれば、明治十

六年上京して叔父加藤恒忠を訪ねたとき、恒忠はからかひ半分、おまへは朝にあつては太政大臣、野にあつては國會議長となるつもりか、とたづねると、子規はまじめに、さうです、と答へた。目的のさだまらぬ者は愚物だと思つてゐたからである。かならずしも政治家をまじめにこころざしてゐたわけではない。

それからまた、加藤叔父はこんなことを言つた。

「墨を白紙にこぼせば紙は黒くなる、實にをかきことなり。又男も女の着物を着け女のまげをゆへば女と少しも變ることなし。併し矢張男は男にて到底女とはいふべからず」云と。余の之を聞きし時の喜びは如何なりしか。三年の學問も此一場の會話に如かずと思へり。然れども未だ哲學者なる者を知らざるなり。

「三年の學問も此一場の會話に如かず」といふ喜びに、どんな誇張もなかつたであらう。するとその喜びはどんな性質のものだつたであらうか。おそらく、それは知的なものといふより、美的な性質のものではなかつたであらうか。假象と本體、現象と本質といった觀念の在り方への示唆を叔父の話から受けた、といつたものではなかつたであらう。子規の鋭敏な感受性は、一見とるに足らぬこんな會話からも、その感受性に訴へる美の領域の擴大を感じたものではなかつたらうか。

すこし飛躍するのをかまはずに言へば、美の領域の擴大——これは晩年の子規にとつて、いのちがけの願ひであり、行爲であつた。晩年といつても、明治三十二年夏ごろから三十五年秋の死迄、「希望の縮小」が零に近づいて行く時期で、先の咯血から十年後にすぎない。明治三十年頃は、庭の中を自由に歩くことができた、といふのが希望であつた。一、二年後には、歩行はできなくとも、立つことができたと思ふやうになつた。さらに三十二年夏ごろからは、立つことはできなくとも、坐ることができたと思ふやうになつた。しかし希望の縮小はここに留まらなかつた。坐る希望も断たれた、せめて一時間なりとも苦痛なく安らかに仰臥し得れば。これが死の前一年有半の子規の姿だつた。「希望の縮小」に耐へて、息をひきとる寸前まで子規の奮闘をうながしたのは、美の領域の擴大である。それが子規には可能だつた。六疊の病室、貧しい調度品の類、何の變哲もない狭い庭、この小さな空間の中で、美の領域を無限に擴大する發見、行爲が、子規の、今日をいかに暮すか、であつた。これは意志だけでは不可能である。「三年の學問も此一場の會話に如かず」といふあの喜びを感じ得る、無邪氣なほどの鋭敏な感受性がなければ不可能である。

子規が哲學を生涯の目的と決めたのは明治十八年の事だといふ。やがてハアバアト・スペンサアを知つた。いやスペンサア以外に哲學者といふものを知らなかつた。スペンサアを子規がどんな讀み方をしたか、よくわからない。しかし或る程度の影響、といふか、子規の氣質に共鳴し得る思考の運び方を、スペンサアに見出して喜んだといふことは言へさうに思ふ。

たとへば後年、俳句や歌の批評などにみられる子規の特徴は、明晰さ、経験の具體性の強調と言へよう。餘韻とはあいまいさの度合に比例する、と言つてのけるやうなところに、それはあらはれてゐる。「ホトトギス」に連載された『蕪村句集講義』といふ蕪村の輪讀會の記録があるが、そこでの子規の發言には、微に入り細をうがつ執拗さがある。その執拗さは、餘人なら餘韻として黙過するところを、さういふ餘韻を根こそぎ、作者の経験の具體へと還元せねばやまぬ情熱を感じさせる。それが不可能な場合、子規はそれを餘韻とは呼ばない。厭味と言ふ。

もともとそれは子規の氣質に根ざしたもので、あへてスペンサアの青年期における影響といつたものではないかもしれない。だがスペンサアによつて、子規の氣質が自覺的になつたとは言つてよささうである。子規はその後ハルトマンの『美學』を叔父から送つてもらつた。しかしハルトマンからは何の影響も受けなかつた。ここには、イギリス經驗論の思考方法に馴染んだ子規に、ドイツ觀念論の流れの考へ方は受け入れにくかつた、といふことがあるかもしれない。スペンサアにとつて、ヘエゲルのコスモロジイなどは巨大なドグマの積み重ね以外の何ものでもなかつたからである（スペンサア『科學の起源』）。

子規は、哲學を第一の目的などと言ひながら、詩歌、小説に熱中してゐた。高等中學時代、人情本を貸本屋から借覽するのに毎月一圓を費やしてゐた。

かくの如く余は哲學を志すにも拘らず、詩歌を愛すること甚しく、小説なくては夜があげぬと思ふ位なりき。余は不思議に思へり。何故に哲學といひ詩歌小説といふが如き全く反對の者を、兩立し難き者を（なぜ反對と思ひしかといふに、哲學者は四角四面なる者に文藝の末技などに區々たるものにあらず、僧侶が小説を作りしこともなく、スペンサーが詩歌を作りし話をも聞かざればなり）同時に好むかとをかくしく思へり。併し己れはどちらとも決しかねる故、目的は哲學なり、詩歌は娛樂なりと揚言せしが、陰には哲學と詩歌の間には何か關係あれかしと常に思へり。其後漸く審美學なるものあるを知り、詩歌書畫の如き美術を哲學的に議論するものなることを知りしより、顔色欣々として雀躍するの思ひを生じ、遂に余が目的を此方にむけり。

（「哲學の發達」）

しかしこの「審美學」なるものがハルトマンの『美學』で、そのてんまつは既に述べたやうな次第だつた。

子規の「哲學」あるいは「哲學」への期待とは、結局、彼の個性に根ざす美感が共鳴し得る、何かの體系的論理との出會ひの期待の別名ではなかつたであらうか。自分の感受性を押し通すことで、子規の右に出る文學者は幾人ゐたであらうか。それはわがままと言つていいほどである。彼はわがままと押し通した。しかし固執といふのとはちがふ、何かそこには、わがままが強引な印象を呼ばない、自然な無邪氣がある。わがままが、そのまままで正直であ

り、無邪氣であるやうな押し通し方が感じられる。

さういふことが、子規の「讀書」とか「學問」とかの言葉にも、前提としてこめられてると思はれる。一度は自分の感受性を抑へて、對象に屈從する過程を必須とする意味での「學問」や「讀書」を、おそらく子規は意味してゐない。と言ふのが言ひ過ぎなら、「學問」や「讀書」に、さういふ手續きの必要はむろん認めながら、それがあたかも自己目的であるかのやうな、知識の堆積に重點のかかる「學問」「讀書」を意味してゐない。

自分は今も昔も心の底から讀書が好きではない。讀書よりは氣隨氣儘に遊び暮すのが好きだが、しかし、讀書を廢するとしたら、とても耐へられない。讀書慾は、自分といふ人間の全慾望の七十パーセントを占めてゐる。讀書は好きでないが、讀書慾は旺盛である。これは自分が多情多慾のせりである。もしも巨萬の富があれば、それで遊び暮して、讀書などしないであらう。してみると、讀書慾は、金のない自分の負け惜しみと言つてもいいが、それよりも幼時から仕込まれた習慣なので、自分のやうな貧乏な境遇の者は、この習慣を生かして、將來の方針とせざるを得ない。子規は、こんなことを『讀書辯』という文章で言つてゐる。

明治二十二年の八月の文章である。

ここでも子規の考へ方、生き方の特徴はすでにあらはれてゐる。讀書慾を、他の慾望、色慾とか食欲とかと同質、同列にみてゐる。シニクなところはすこしもなく、天真にさうみてゐる。かういふ認識は、喀血して醫者から靜養をすすめられ、一年廢學せんか、と思ひ迷